Atonement **短編 & 設定資料集**

T k

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A t o n e m e n t 短編&設定資料集

【Nコード】

N 4 2 7 5 V

【作者名】

T k

【あらすじ】

こちらにて執筆させて頂いているA t o n e m e n tの外伝と設定資料を載せていこうと思っております。設定資料集にはネタバレ要素を含む可能性がありますので、ご注意ください。

外伝1 出会い

何処まで続いているか解らない大森林

その中を、私は駆け抜けていた。

今夜は満月　しかし鬱蒼と茂った木々は灯りとなる月光を覆い尽くしており、視界はともではないが良いと言える状況ではない。木々の合間から差し込む光だけでは、標となるにはあまりにも弱く、頼りない。

足場も悪い。ところどころから根が露出しており、転がる小石は段差を作り出している。低木は頭の高さ程の位置に枝を伸ばし、枝から垂れる蔓はただでさえ悪い視界を狭める。また、昨夜の豪雨の影響で大地も泥濘を帯びており、それは道行く者の障害となっている。ゆっくりと足場を見ながら進まねば、常人ならばその障害に足を取られて転倒してしまう。

しかし、それでも、私は畏のように張り巡らされた自然の障害をもともせず駆け抜けた。こんなところで転んでいる暇など無いから。

奔る　跳ぶ

「しくじったみたいね」
迂闊だった。

視界の悪い森林を利用し、相手を巻こうとしたが、失策だったようだ。相手はこのような地での戦闘及び搜索に慣れている者に違いない。後ろから迫る足音に耳を澄ますと、確実に距離を縮められているのが、よく解る。

でも、此処で倒れるわけにはいかない。自分がどんな運命を背負っていたとしても、何としてでも生き延びないといけない。逢わなければならぬ相手がいるから

元々、私は素早い動きは得意じゃない。でも、そのようなことを言っていられるような状況なんかじゃない。だから、私は止まらず

に奔り続けた。

しかし

「痛っ……っ」

肩口に走る激痛。痛みを走った肩口に触れてみると、生温かい感触

既に、相手の攻撃の射程範囲内にまで追い付かれていた。

「こうなったら、戦うしかない　！　……覚悟を決めるわ、姉さん」

このままじゃ、いずれ追い付かれる。それならば、潔く戦うことを選ぶしかない。

そして　私は前方に手を翳し、空中に法陣を描いた。数秒の詠唱の後、その法陣から青白い閃光を帯びた光が放たれた。

「眷族の力を、なめないで……！」

光の周囲には、雪の結晶が舞い踊っている。

私の術だ。冷気や氷を操ることに特化した私にとって、これくらいの芸当は容易い。

姿を見せた追手の一人に冷気の光線を当てて、そのまま相手の動きが止まるまで、私は冷気の光線を浴びせ続けた。やがて、一体の氷像が完成した。

まだ追手はいる。でも、この程度の相手ならば、蹴散らすのは容易い。

だから、私は逃げずに戦うことを選んだ。

まずは、遠距離から飛んできたナイフを冷気の風を起こして軌道を反らす。そして、丸腰になったところに、こちらから氷で作った刀を放ち、相手の急所を捉える。

眉間や首元に氷の刃が刺さった相手は、断末魔の叫びすら上げずに崩れ落ちた。これで、二人。

残るのは三人。思ったより、甘く見られているみたい。

自分の力を過信しているわけではない。でも、人間が私を相手にすること自体が、無茶なのだ。

「はあ……はあ……」

だいぶ体力を消耗していたけど、私は攻撃に転じた。その場でしゃがみ、地面に掌を置く。そのまま大地に方陣が描かれ、そこからツタの葉のように白い氷が三人の敵へと向かって伸びていく。

三人はそれを回避しようとしたけど、出来るわけがない。長年の努力で身に付けたこの技を、簡単に打ち破られるほど私は甘くない。三人は、そのまま地面から伸びた氷のツタに身体をがんじがらめにされ、そのまま動きを止めた。

「これで……一段落……」

私のことを知っている者は少数。私 《女教皇》と敵対する《戦車》の刺客は、これですべて仕留めた筈。私は眷族でも中立を保っているつもりだったけど、そうはいかないらしい。眷族の中に、他の眷族の力を奪おうとする者がいるからだ。だから、眷族の中でも力の弱い私を倒そうとしているに違いない。

自らが出ず、大量の部下を雇っているあたり眷族らしくない。でも、それが彼のやり方。考えただけで虫唾が走る。

「はあ……はあ……」

正直、意識を保っているのがやっとだった。

というのも、眷族に選定されてから、このようにずっと戦い続けてきた。勿論、常に一人というわけじゃなかったけど、それでも力を消耗しすぎたのは明らかだ。

暫く休めば何とかかなるかもしれない。でも、そんな余裕など私には許されていない。

今は 追手を全て仕留めた今は、とにかくこの場から離れることを選ばなければ

足を一步踏み出したその時だった。

「えっ……？」

嘘 ？

足場の感覚がなかった。

私が空中に身を投げ出されたのに気付いたのは、その数秒後。
そして、そこで私の意識はすぐに途絶えた。

*

俺の名は、ハーヴィー・アステール。しがないよろず屋をやっている。

よろず屋つてのは、大体想像つくと思うが、依頼された仕事をやる商売だ。人探しや物品の運搬、店の手伝いや子守りもやっている。中には、暗殺やかたき討ちつてのものもあるらしいが、俺はそういう「汚れ仕事」はやらない。血生臭いのは嫌いだからな。

俺のことを乱暴者だとか不良だなんて言う奴がいるが、それは違う。いや 半分は正解かもしれないが、それでも自分では違うと思っっている。

確かに、町では喧嘩に明け暮れている。それでも、自分からは手を出さない主義だ。

まあ、ガキの頃はとにかく暴れるのが好きで、自分から突っ込むこともあったが、今は違う。

俺が喧嘩をするのは自分の身を守るためだ。

だから、今も自分の身を守るべく、莫迦な奴らを相手にしている。つまり、今回の仕事 といつていいかは知らねえが、今回の仕事は喧嘩相手つてやつだ。報酬はゼロだがな。

血生臭いのは嫌いだが、売られたなら仕方がない。

今回は、ご丁寧に町の外にある森までご招待つてワケだ。

「今日という今日は、てめえをぶちのめすからな！」
威勢のいい奴だ。大柄な体格から、その豪放な性格も容易に想像できる。

恐らく、パワーは俺より強いだろう。今は木剣を持っているが、戦場に出たら戦槌ウォー・ハンマーや槌鉾メイスが似合うに違いない。

しかし、チキン野郎でもある。か弱い俺に対して、五人がかりで

かかってきてやがる。

このデカブツは、その中のリーダーだ。何日か前にカジノでギャンブルをやった時に、俺にボロ負けした腹いせに喧嘩を売ってきた奴だが、返り討ちにしてやった。今回は、その腹いせに徒党を組んできたらしい。

勝てない相手じゃない。正直、余裕だ。

「おいおい、か弱い俺相手に、五人がかりかよ。何ビビってんだか」木剣を肩に置いて、相手を挑発する。この手の奴らは、すぐに挑発に乗ることは解っている。

「て、てめえっ！ お前ら、やっちまえ！」

やっぱり、予想通りだ。デカブツの手下どもが、一斉にかかってきやがった。

まずは、手近な奴の攻撃を身を低くしてかわす。手当たり次第に殴ってきたので、回避するのは容易かった。

そのまま、俺はそいつの足に、木剣での一撃をくらわせる。これが本物の剣なら、相手の足はザックリとってしまったている。「殺し」に関しては俺はド素人だが、刃物で切られれば血が出るし、それが多ければ死ぬってことくらいは解る。

今回は、練習用の木剣だからそういうことはない筈だ。尤も、当たり所が悪ければ、逝っちまうことも有り得るだろうけどな。

足に一撃を受けた奴は、手に持っていたナイフを落とし、その場で足を抑えながらびよんびよんと飛び跳ねる。そりゃ、向こう脛に打撃を加えられれば痛いに決まっている。

そして、その動きは他の奴の邪魔になったようで。飛びかかってきた一人と跳ねた奴が頭をぶつけあって、そのままオチた。勝手に自滅して、馬鹿な奴らだ。

早くも二人が片付いた。残る三人は、リーダーのデカブツを含め、大きな木剣を持っている。

俺は戦に関しては素人だが、ガタイが良いからと言ってデカい武器を使えばいいってのは大きな間違いだってことくらいは解る。特

に、このような狭く薄暗い森の中では、デカイ武器は扱いづらい筈だ。

俺が使っているのは、小振りな木剣だ。当然、リーチは短いし威力も低い、云わば非力な奴が使うような武器である。本物で考えると、グラディウスやスパタといった、小剣ショートソードの類のものだろう。

しかし、その分扱いやすさは剣の中でも抜きん出ている。つまり、誰でもそれなりに使いこなせるものだ。尤も、極めるにはどの武器と変わらないほどの訓練が必要だろう。でも、このような喧嘩に使うにはもってこいつてワケだ。勿論、タダの喧嘩に本物を遣うわけにはいかないがな。本格的になると、カッパルゲル喧嘩用の剣なんていう真剣を使うらしいが、そんな血なまぐさいのはごめんだ。

「うおおおおおおおおおおおっ！」

無駄にデカイ声をあげて、右側の奴　ガリガリの奴だ　体格と合わないようなデカイ木剣を振りおろしてきた。キレも良いし、体格の割に使いこなせている。だが

俺は、そいつの攻撃を小振りな木剣で軽くガードした。結構な衝撃が来たが、動けないほどではない。そのまま相手の攻撃を受け止めたまま、奴の鳩尾にパンチをお見舞いする。すると、ガリは潰れたカエルみたいな声を出して、そのまま気絶した。

次にかかってきたのは左の奴　こっちはデブだ。体格には合っていることは合っているが、動きが笑える程に鈍い。つまり、読みも簡単だ。しかし、こういう奴は身体についた脂肪が鎧代わりとなっているため、胴への打撃は大した効果が出ない。

そうなれば、狙うのは頭だ。軽く脳震盪を起こすか、首に一発与えれば簡単にオチる。

俺は奴の振り下ろした剣を回避すると、それを足場代わりに奴の肩に上り、項に木剣による一撃をお見舞いした。案の定、デブはそのまま崩れ落ちた。

残りは

「ひ、ひいいいいいつ、やっぱ強え……」

「あ、おい！ 逃げやがった……」
つまんねえ。リーダーのデカブツは、手下が倒されたのを見て逃げ出しゃがった。ひよっとしたら、あのなかで一番弱いんじゃないだろうか？
ともかく、これで奴らの依頼 もとい挑戦はこれで完了ってワケだ。ちと不完全燃焼だが、これは仕方がない。
俺は木剣を麻袋に仕舞うと、伸びている馬鹿どもを放置して、近くの川で水浴びをすることにした。

せんせん 潺潺と流れる川に木々の合間から差し込む陽光が映り、プラチナのような輝きを放っている。

心地よい温度の水が、俺の火照った身体をいい感じにクールダウンする。

俺としては風呂に入った方が落ち着くが、今日はどういうわけか、すぐに身体を洗いたい気分だった。

この水浴びをしているのが絶世の美女だったら、覗きをしている不届き者は鼻の下を伸ばしたり、下の剣で戦闘態勢に入ったりするんだらうが

お生憎様だ。今、水浴びをしているのは、しがない青年ってワケだ。まあ、そっちの趣味の奴もいるという話は聞くがな。

「あー、冷てえ。最高だぜ」

アレも良い感じにクールダウンしている。

本格的に使うのはいつになるのだろう。今までは、娼婦相手に何発か撃ったぐらいだ。それと、自己処理 莫迦なこと言わせんじゃねえ。

それはともかく、俺は水浴びをしつつも荷物の管理や周囲の警戒は怠っていないかった。

十二年前にあった邪神大戦が終わってからも、各地で《タルタロス》のタカ派の残党が動いていると云う話はよく聞いている。また、

町の外にいれば追剥と遭遇してもおかしくないわけだ。

尤も、今は文無しだ。だが、服を持っていかれたら、俺はスツポンポンのまま家に帰らなければいけないなくなるわけで、それは俺のプライドというか羞恥心が許さない。

だが

「……………マジかよ」

見間違い　じゃなかった。

今まで水浴びに夢中で気付かなかったが、川の傍らに誰かがいるのを見つけた。

幸い、俺の裸は見られていないようだが　そいつは倒れているのは明らかだった。髪長さや服装から判断すると、女だろう。

見ず知らずの奴だが、このまま放置するってわけにはいかなそうだ。俺はすぐに小川から上がって服を着ると、倒れている女のもとに駆け寄った。

「おい、大丈夫か？」

身体を揺ると、僅かに反応があった。しかし、意識は朦朧としている。

しかし、だいぶ息が荒く、かなり衰弱しているのが解る。また、全身が傷だらけだ。白い肌のいたるところが裂け、身体中がスタボ口である。幸い、可愛い顔には被害がないようだ。

一見、そいつは年端もいかぬ女の子のように見えた。だが、頭から生えた兔のような長い耳を見れば、彼女が人間ではなくポケモンという種族であることは、勉強嫌いの俺でも容易に解った。

確か、この特徴が見られるのは、グレイシアという種族だろう。髪の毛や耳の色からも、それは判断できる。イーブイというポケモンが、氷や冷気の力を得た種族だ。

本来、ポケモンは獣の姿をしているが、中には亜人種と呼ばれ、人間に近い格好をしている者もいる。この娘も、その亜人種であるようだ。

(なんか薬あったかな。応急処置くらいは……………)

バックパックから、薬を探しだす。

冒険者や傭兵をやっているわけじゃないが、少し出かける時は、軽食と薬くらいは持ち歩くようにしている。よろず屋の仕事で、町から出ることは珍しくないからだ。

まずは、手始めに服を脱がせる。脱がさなきゃ手当てができないからな。

白いブラウスを脱がせると、その下には小ぶりな胸を包みこんだブラがあった。濃紺のロングスカートの下は、黒タイツだ。ズタズタなので、それも脱がせることにする。それにしても、年頃の女の子の割には随分と慎ましいというか、控えめな格好だ。もう少し派手な格好をしてもいいと思うが、まあ、そこは個人の好みなんだろうな。

言っておくが、変なことをするわけじゃない。傷口に軟膏をぬるだけだ。

白く細い身体が露わになる。背中には、グレイシアの身体に見られる青い痣のようなものがあった。耳と尻尾も見ると、改めて彼女がポケモンであることを認識させられる。

それでも、身体は人間の少女のものといってもいい。お世辞にも女らしさを示す果実はデカいとは言えないが、それを除いても彼女の身体は、まるで雪のように美しかった。このまま抱きしめたら、溶けてしまうのではないかと思うほどに。

一糸まとわぬ少女の身体に、軟膏を塗り、包帯を巻いていく。誰かがこの場面を見ていないことを祈るばかりだ。この状況を傍から見れば、男が前戯をしているようにしか見えないんじゃないだろうか。勘弁してほしいぜ。

とりあえず、傷は大丈夫だろう。ただ、体力をかなり消耗しているのは明らかだった。

「なんか腹の中に入れてやんねえとな……」

包帯を巻き終わったら服を着させて、近くにあった洞穴へと運ぶ。此処ならば誰かに見られる心配もないし、暫くの間休むことが出

来るだろう。

俺は外套をシート代わりに敷くと、グレイシアの女の子をそこに横たわらせた。

グレイシアの女の子の意識がはっきりと戻ったのは、暫くしてからだった。

上半身を起こし、辺りをきよろきよろと見回している。その度に、兎のような耳がぴよぴよこと動いて、何処か微笑ましい。

「よ、おはようさん。気付いたか？」

「……………」

なんてこった。出来るだけ明るく声をかけたつもりだが、こっちを見たまま無反応だ。

いや 違った。反応はあったが、俺にとってはあまりよろしくない反応だ。

「っ！」

「あ、ちよっと、おい早まるな！」

言葉にならないような声を出し、グレイシアの女の子は俺に向かって、ダガーを振り翳してきた。俺は咄嗟に、立てかけてあった木剣を持ってそれを受け止める。

ヤバい。眼がマジだ。マジで俺を殺そうとしている。

助けられない方が良かったか？

「だあああつ、別に襲いやしねえよ！ 短剣を下ろせ！」

グレイシアという種族は非力だと聞いていたが、やはり、それはポケモンの中での基準のようだ。俺も腕っ節が強いわけじゃないが、ほぼ互角だ。

俺は不安定な体勢でダガーを受け止めているため、分が悪い。それなら、ちよっとこの子には悪いが

「悪いな、ちよっと痛いぜ！」

「きやつー！」

女の子の足に、軽く足払いを入れてやった。見事に引つかかったようで、女の子はそのままバランスを崩して、転びそうになった。

俺はすかさず手刀でダガーを叩き落とすと、女の子を俗に言うお姫様抱っこで抱き上げる。

「くっ……、あなた達なんかには……屈するわけには……」

グレイシアの少女は恨めしそうな視線で、俺を睨んできた。

どうやら、色々あったらしい。色々と気になるが、まずは落ち付かせるのが最優先だ。

「何勘違いしてんのか知らねえけど、別に俺はお前を食っちゃおうなんて思っていないぜ？ それに、もし俺がお前の敵なら、とつくに寝首をかいてるぜ」

俺の言葉に、女の子はキョトンとした表情を見せた。どうやら、話は通じたようだ。

そう判断した俺は、女の子をそつと地面に下ろして座らせてやった。

「何なの……あなた……」

まだ警戒しているようだ。まあ、無理も無い。見ず知らずの男に、辺境の森の洞穴に連れ込まれていたんじゃあ、そりゃどんな屈強な女騎士だって焦る。

それに、ポケモンとはいえ、こんな少女が森のはずれで倒れているのだ。何かしら事情があるのは間違いないだろう。それを踏まえると、警戒されるのは仕方ないことだ。

だが、このままでは何の進展もない。特に素性を明かしても困ることはないの、俺は簡単な自己紹介をすることにした。

「俺か？俺はこの近くにあるシエルクって町で、しがたないよろず屋をやっているんだ。んで、ある依頼の帰りに、倒れているお前を見つけたんだ」

依頼と言っても、喧嘩の対戦相手になってやっただけだな。

まあ、その喧嘩相手のおかげで、こいつを見つけることを出来たワケだ。一種の運命って奴かもしれない。俺はそういうのは信じな

い性質だが、このまま放置されてたらこいつの命がヤバかっただろう。

「そつ……」

どうやら、信じてもらえたらしい。それだけでも充分だ。

「その……助けてくれたのね。ありがとう……」

「礼には及ばねえよ。気にすんな。でも、一体何があったってんだ？」

「……………」

無言だ。やっぱり、何かワケアリなんだろう。それならば、俺は別に追求する気はない。

「話したくないならいいさ。それより……ほらよ。腹の足しにはなるだろ」

俺はバツクパツクから水筒とパンを取り出すと、女の子に投げ渡してやった。お世辞にも美味しいパンじゃないが、何かしら腹にいれないとぶつ倒れちまうだろう。

「毒なんて入ってねえよ。そもそも、俺にはそんな知識なんか持ってねえ」

しかし、女の子はなかなか手を付けようとしていない。やっぱり、警戒しているのか？

「おい、衰弱してぶつ倒れていたんだ。腹もすいている筈だ。食欲が無くて、入れるもん入れとかねえと、またぶつ倒れるぞ？ それとも、アレか？ 食べる体力が無いなら俺が口移しを……」

冗談で言っただつもりだが、突然女の子の周囲の気温が低下したので、俺は思わず口を噤んだ。

グレイシアという種族は、氷や冷気を扱つと聞く。下手したら、氷漬けにされていただろう。

「ったく、冗談だよ。とにかく、食つとけ」

「……………」

何処か恥ずかしそうに頷くと、彼女はちびちびとパンに手を付け始めた。

無言で食べるその姿は、何処か可愛らしい。食べるだけの体力は戻っているようで安心だ。

彼女が食べ終わり、水を飲み干すのに然程時間はかからなかった。会話はまったくなかつたが、それでも見ているだけで退屈はしなかつた。

「お前さ、名前……なんていうの？」

知らず知らずのうちに、俺は相手の名前を聞いていた。自分でも何故なのか解らなかつた。

ただ、言えるのが　こいつと一緒にいたいと、心のどこかで思っていたと云うことだ。惚れたとかアレな世話をさせたいとか、そういうわけじゃない。ただ単に一緒にいたいだけだ。

ダメならダメで、それで良かったが。

「おっと、いけね。相手に名を聞く時は、自分から名乗るんだつたな」

そう。最低限のマナーだ。

何処かの吟遊詩人のサーガに出てくる登場人物も言っていた。確か、そいつは妙に真面目な騎士だったことを覚えている。ちなみに、そのサーガというのは、一人の冒険者を主人公としたありふれた物語だ。だが、俺は心のどこかで、そんな冒険者みたいな生活にあらがれていた。

「俺は、ハーヴィー・アステール。呼ぶ時は、ハーヴィーでいいぜ」

ハーヴィーってのは何処かの神話で『高き者』って意味するらしい。隻眼の偉い神様だが、最期は魔犬に喰い殺されたとか。尤も、自分の名前の起源なんざ、どうでもいいけどな。その名前をカッコいいと思ったことも無ければ、嫌だと思ったことも無い。

「……れいしゃ 漣紗」

ぼそりと少女は言った。レイシャ、と。

語幹からすると、オウラン風にも聞こえるが、大陸の発音でも有り得そうな不思議な名前だ。

「漣紗……か。あのさ、ダメもとで誘おうと思うんだけど……」

一呼吸置いて、言った。

「俺と一緒に来ないか？」

暫くの沈黙。

そして、澪紗は可愛らしい微笑みを浮かべて、こくりと頷いた。

彼女の中で、どのような思いがあったのか、俺は知らない。

だが、此处で俺と澪紗は出会ったわけだ。

俺の名は、ハーヴィー＝アステール。よろず屋だ。

だが、今はしがないよろず屋じゃない。

頼れる相棒が出来たからな。

外伝1 出会い（後書き）

一人称視点に挑戦。やはり、難しいですね……。

本編の五年前のお話です。随分と端折っていますが、ハーヴィと澪紗が出会った頃の話を書いてみました。

R15タグは必要ないと思っただんですが、一応ね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4275v/>

Atonement 短編&設定資料集

2011年8月2日03時27分発行